



著者 森 禮子 (もり れいこ)

作家，劇作家。昭和3年，福岡市生まれ。県立福岡高等女学校卒業。昭和22年，西南学院バプテスト教会にて受洗。昭和55年，『モッキングバードのいる町』で第82回芥川賞を受賞。主な著書は『光るひととき』（主婦の友社），『愛と迷いと』（聖文舎），『天の狛犬・他人の血』（文藝春秋）などがある。

ひとりの時間

定価 一、一〇〇円

昭和五十五年九月八日 第一刷発行  
昭和五十八年十月十四日 第六刷発行

著者 森 禮子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二 郵便番号 一〇四  
振替 東京一四四八八六 電話 東京(〇三)五四二一九六七

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえ  
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Reiko Mori 1980 Printed in Japan

著者 森 禮子 (もり れいこ)  
作家、劇作家。昭和3年、福岡市生まれ。県立福岡高等女学校卒業。昭和22年、西南学院バプテスト教会にて受洗。昭和55年、『モッキングバードのいる町』で第82回芥川賞を受賞。主な著書は『光るひととき』(主婦の友社)、『愛と迷いと』(聖文舎)、『天の狹犬・他人の血』(文藝春秋) などがある。

ひとりの時間

定価 一、一〇〇円

昭和五十五年九月八日 第一刷発行  
昭和五十八年十月十四日 第六刷発行

著 者 森 禮子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二 郵便番号 一〇四  
振替 東京一―四四八八六 電話 東京(〇三)五四二―九六七一

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえ  
します。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

印刷所 白陽舎印刷工業株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Reiko Mori 1980 Printed in Japan

# ひとりの時間

## 目次

女の人生を紡ぐ愛……………7

自由を捧げることによって得る自由……………9

心に不幸を住まわせるひと……………14

ユーモアは人間の潤滑油……………19

友情を育てる条件……………24

絶望を知った女のやさしさ……………29

女の心をつむぐ手仕事……………33

ライフワークを支える情熱……………36

もう一つのやさしい時間……………41

ひとり暮らしを支える花……………43

センスのある人は料理が上手……………47

心が通いあう手紙のコツ……………52

日記が語るわが人生の航跡……………57

住みたき家は心静まる茶室……………62

禍福は糾える縄の如し……………67

一度きりの人生だから……………72

本に求める人生の味わい……………77  
忘れっぽいのも悪くない……………82

生かされてある至福……………87

孤独があつてこそ真の出会いがある……………89

生かされていることの自覚……………94

目に見えぬものへの畏れ……………108

生命の息吹きにふれ合うとき……………113

人生の価値を伝えてくれた母……………118

暮らしを愉しむ心……………121

ひとり暮らしの正月の愉しさ……………123

ケチケチ稼いでケチケチ使う幸福……………128

古本屋さんとの長い長いおつき合い……………133

遠来の客たち……………138

雀の執念……………143

ガビが私の家族になったわけ……………148

|                |     |
|----------------|-----|
| ガビと私の濃密な時間     | 153 |
| 運河のある町の暮らし     | 158 |
| 旅に結ぶ出会い        | 161 |
| 自然と暮らす安らぎ      | 163 |
| キノコへの憧れ        | 167 |
| 心に響く方言のやさしさ    | 172 |
| 伝統の文化を支える自負    | 177 |
| サクレ・クールの静謐な時間  | 186 |
| 旅が結ぶ人との出会い     | 191 |
| 文学に探る女の生き方     | 197 |
| 三浦綾子著『自我の構図』   |     |
| 自我の執着がもたらす愛の破滅 | 199 |
| 山本道子著『ベティさんの庭』 |     |
| きり拓く愛を見失った女の孤独 | 209 |
| 矢代静一著『北斎漫画』    |     |
| 人間のなかにひそむ魔性    | 219 |

水上勉著『蛙よ、木からおりてこい』

死に直面してつきあたる生の意味……………228

あとがき……………237

ブックデザイン——朝倉  
攝

女の人生を紡ぐ愛



## 自由を捧げることによって得る自由

### 互いの自由を認めあった結婚の思わぬ結末

“亀の甲より齡の功”とは言うものの、中年の坂を越えると本人自身には一向に目出度いとは思えないのが、まずは本音。正月を迎えるたびに、あつという間に過ぎてしまったこの一年を振り返って、呆然としてしまう。どう考えても、子供の頃の一年とは永さが違うとしか思えない。

「時間というものは、年齢と共に加速度がつくのではあるまいか」と言ったら、合理主義者の女友達が、「そんなことはない。人を待っている時間は永いではないか」と、真顔で打ち消した。彼女の説では、要するに子供より大人の方が忙しいから、一年が早く経つのだと言う。

しかし、子供の頃だって学校があり、宿題があり、飼犬の世話があり、遊びがあり、親の目を盗んでの読書があり、絶え間なしの怪我やら病気があり、家の手伝いがあり、結構忙しかった。心配事だって、今から思えば愚にもつかぬようなことだけれども、子供なりに事欠かなかった。

まあ、子供の忙しさと大人の忙しさの違いといえば、子供のは、おおむね自分だけに関わる忙しさで、大人のは、他人と関わりがある忙しさと言えるかも知れない。つまり大人の忙しさの大

部分は、会社の仕事であるとか、冠婚葬祭であるとか、家族や他人の世話であるとか、拡散的であり、従って感動に乏しく、時間が慌しく稀薄に流れ去ってしまうのかも知れない。

いずれにしろ、年齢と共に歳月が速くなるというのは、ますます目出度くないことになるけれども、しかし、この齢になって過ぎた時間を振り返ると、いろいろ気づくことがある。とりあえず例をひとつあげよう。

十六、七年前、友人のある画家が指導していた絵画サークルに、大学生の若い女性が入って来た。学生運動華かなりし時代の影響か、なかなか激しい否定精神の持主で、サークルの人たちの作品を片っ端から、「くだらない」と一言で否定してのけた。たまたまその場に居あわせた私は、まだデッサンもしたことのない素人の若い女性が、サークルの人たちの面前で否定してのける勇敢さに愕くと同時に、いかにも現代女性らしいとある爽やかさを覚えた。

とはいえ、このB子さんも男性に対してはそれほど否定精神が働かなかったらしく、大学を出ると間もなく、級友のひとりと結婚した。結婚式の席上、新郎は、

「ぼくは未来のサルトルで、B子さんは未来のボーボワールです」と、颯爽と宣言したそうである。サルトルとボーボワールは、結婚という社会的形式をしりぞけ、お互いの自由を認めて結ばれている関係の男女だけれども、この場合は、結婚後も家庭に束縛されず、自由に個性的な仕事をするという意味だったのだろう。

確かにB子さんは、夫や家庭に束縛されているふうがまったくなかった。結婚後も絵画の勉強

をつづけていたが、女友達と共同でアトリエを借りて何日も泊り込んで制作したり、男友達と夜遅くまで飲み歩いたり、ひとりで海外旅行をしたり、まるで気楽なお嬢さんのように見えた。画業のほうは伸び悩んでいたが、生活がかかっているわけではないから、それほど苦にはならないふうだった。意志的か偶然かは知らないが、結婚後十数年経っても子供はなかった。

ところが去年の秋、突然、B子さんから電話がかかって来た。フリーのルポライターをしている夫なる男性が、その朝、家を出て行ったというのである。理由は、二年ほど前から他に女性が出来ていて、その女性と暮らしたいと離婚を申し出られ、Bさんが拒絶すると、身の廻りの物をまとめて出て行った、どうしたらよいだろうと、不意に大地が揺らいだような声の相談だった。もちろんこういう相談は良い知恵を借りたいというよりも、誰かに訴えたい衝動の方が強い相談で、話を聞いてもらえば気持が落ち着き、そのうち自分で打開策を考え出すものだし、またそれ以外に方法はない。当事者同士の永年の微妙な感情の動きの知らない第三者が、したり顔に忠告などしてもまず役に立たないし、かえって事をぶち壊しにして恨まれかねない。で、一時間半近く、私はただ聞き役に廻っていたが、そのあと暫く、とりとめもなくいろんなことを思った。

### 束縛される自由を忘れた愛のもろさ

まず第一は、新しいことを口で言っている、所詮、人間はそれほど変らぬという感慨である。どういう理由があろうとも、サルトルとボーボワールの関係を理想としていた人間が、べつな女

性と暮らすために離婚を申し出るといふのは、おかしい話である。社会的形式などにこだわらず、自由にさっさと暮らせばよい。しかもB子さんの訴えを信じれば、B子さんが家事に不熱心ということが別れる理由のひとつであるらしい。

そこで今度は、自由とは何ぞやという問題に突き当たった。B子さんは、夫や家庭に束縛されないことを人間としての自由と考えている。しかし、人間には束縛される自由というものもあり、それが愛というものではないだろうか。なぜなら、何かを愛するということは、その対象を気遣うことに他ならない。チェコの作家カレル・チャペックは、そのたのしいエッセイ集『園芸家十ニカ月』の第一章にこう書いている。

「庭づくりをはじめると、ものの考え方がすっかり変ってしまう。雨が降ると、庭に雨が降っている、と思う。日がさしても、たださしているのではない、庭にさしているのだ。日がかくれと、庭がねむって、今日一日のつかれをやすめるんだ、と思つてほつとする」

そして園芸家というものが、自分の庭のためにいかにキリキリ舞いし、観劇や休暇旅行のたのしみも放棄してしまうかを、ユーモラスにのべている。

主体的な自由な愛、とは、こうした態度のことではないだろうか。

話が逸れてしまったようだが、B子さんという私よりずっと若い世代の、新しいと見えた生き方を十六、七年眺めたお蔭で、否定することは易しいが創造することの難しさ。新しい論理だけでは人間の本性は越えられないこと。真似が出来そうに思えても結婚という社会的形式にもよら

ず、子供という本能的絆にもよらず、自由な愛を持続していたサルトルとボーボワールの非凡さ。何かから自由であることの他に、何かに自己の自由を捧げることによって得る自由があることなどが、確かに私の眼に映ってきた。また私自身、昨年一年のあいだに、これまで味わったことのない暖かな人の情や、苦さを知った。"亀の甲より齡の功"とは、こうしたことを言うのだろう。生きていることは、やはり、目出度いのである。

## 心に不幸を住ませるひと

### 愛想笑いの奥に潜む不幸の罠

年齢は多分、五十五、六くらいで、定年退職したサラリーマンの奥さんということだった。三年前、アパートの同じ階に越して来たとき、「あ、面倒なことになりそうだな」と危惧を覚えた。小柄な奥さんの表情が、愛想良く笑っているにもかかわらず、どこかお面のような感じがあったからだ。

見たところ夫婦仲は良さそうだけど、何か不幸な事情があるのかしら……と、ちらと思ったりした。

暫く経つうち、この奥さんがたいへん綺麗好きで、働き者であることがわかった。仕事に追われて家の中にひき籠っていることが多い私が、時たま外に出ると、いかにも欄性らしい身ごなしでドアを磨き立てたり、階段下にある撒水用の水道栓の前にしゃがみ込んで、洗いものをしていく奥さんを見かけた。洗っているのは網戸や植木鉢であったり、共用の塵芥缶であったりした。出来た奥さんだなと感じ入り、外見の印象だけで危惧を抱いたことを申し訳なく思いもした。